

平成30年6月8日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16771

研究課題名(和文) 卜部兼右本系『先代旧事本紀』の研究

研究課題名(英文) The study of the Urabekanemigihon manuscript tradition of Sendaikujihongi

研究代表者

松本 弘毅 (Matsumoto, Hiroki)

早稲田大学・文学大学院・客員主任研究員

研究者番号：30434244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)： 卜部兼右本系『先代旧事本紀』の特徴を明らかにした。兼右本にある異系統の写本との校合跡についてその特徴をまとめ、従来の鎌田純一論の修正を試みた。また、現存最重要の兼永本との関係についても、兼永本の再転写本(転写本をさらに転写した本)が兼右本であるという結論を得た。また兼右本系を含めて、現存する写本がどのような関係にあるのか、途中経過をまとめた。兼右本系は他の系統とは独立的な位置にあるが、兼永本の流れに入ることは間違いない。

研究成果の概要(英文)： I clarified the characteristics of the Urabekanemigihon manuscript tradition of Sendaikujihongi. I summarized the traces of consideration with other manuscripts possessed by Urabekanemigihon manuscript, and revised the theory of Junichi Kamata. Regarding the relationship with Kanenagahon, there is a manuscript copying Kanenagahon, and Kanemigihon copies the manuscript further. I also summarized the relationship between the Urabekanemigihon manuscript tradition and the manuscripts remaining in the present. The the Urabekanemigihon manuscript tradition is independent from other manuscripts, but it is no doubt that it is the Kanenagabon manuscript tradition.

研究分野：日本上代文学

キーワード：先代旧事本紀 写本 卜部兼右本 卜部兼永本

1. 研究開始当初の背景

『先代旧事本紀』(全十巻)は平安初期に成ったと考えられている書であるが、その成立直後から長らく聖徳太子撰という成立事情が信じられ、重宝されてきた。しかし江戸期に入って、『古事記』や『日本書紀』(以下まとめて「記・紀」)などの文章が用いられていること等が指摘され、実際には成立時代がずっと降ることが明らかになった結果、顧みられることが少なくなってしまうという経緯がある。戦後の鎌田純一による再評価を経て、現在では記・紀の受容の一端として注目されて久しい。

『先代旧事本紀』の写本についても鎌田が体系的に調査・分析を行った。その成果は、『先代旧事本紀の研究 校本の部』(1960年。以下『校本』)また『先代旧事本紀の研究 研究の部』(1962年。以下『研究』)としてまとめられ、現在においても『先代旧事本紀』テキストのスタンダードとされている基礎的な書である。

問題は、鎌田『校本』から半世紀以上も経つ現在においてもなお、鎌田の研究が更新されていないということにある。鎌田自身が出した別のテキストはある(神道大系『先代旧事本紀』1980年)が、基本的には『校本』の注を簡略にしたものである。近年鈴木正信によって、巻十(国造本紀)の校訂テキストが出された(『日本古代の氏族と系譜伝承』2017年、初出2013年)。鈴木論では鎌田の触れていない写本の紹介もあるが、写本系統については基本的に鎌田論を踏襲している。また、巻十のみを検討対象としているため、その他の巻については解説も鎌田論にそのまま寄っている。

こうした現状を踏まえ、以前に『先代旧事本紀』の写本調査を一から行った(科学研究費若手研究B、「『先代旧事本紀』の文献学的研究」、2012~2014年度)、鎌田論・鈴木論で触れている写本についても調査し直し、新たに発見した写本もある。そして個々の検討の中で、鎌田の写本系統論にも見直すべきところがあることを指摘した。

本研究では次なる課題として、卜部兼右本系統の写本群を検討した。鎌田は『先代旧事本紀』の現存写本を、卜部兼永本系、卜部兼右本系、石川忠総本系、三浦為春本系の四系統に分類した。兼右本系は、その他の写本にはない特徴があるとして、鎌田が一系とした写本群である。

2. 研究の目的

『先代旧事本紀』の写本群のうち、卜部兼右本系と鎌田が分類した写本群を検討した。具体的な問題点は、「伊勢系」写本との校合跡の問題、兼永本との関係、である。

について。鎌田は兼右本系の特徴を、今は失われた系統、すなわち「伊勢系」写本との校合跡があることと述べている。鎌田は論

文の中でいくつかの校異を挙げて具体的に論じているが、実際には誤りがあったり例として不適なものがあったりと、妥当性を欠く。また、その挙げられた例の数自体も少なく、全巻的な検討が必要である。さらには、既に以前の論で指摘しておいたように、鎌田が「伊勢系」との校合跡であると指摘した兼右本の傍書のいくつかは、実際には兼永本にも見える傍書である。「伊勢系」と鎌田が称した異系統の写本(既に存しない)は、一から検討されるべき問題点を含んでいる。

について。現存する写本のうち、最古かつ最重要の写本は兼永本である。これは鎌田の指摘の通りであり、動かないと思われる。しかしその兼永本と兼右本の関係について、鎌田論を追っていくと、二写本の関係については曖昧である。二写本が親子関係(兼永本兼右本)にあると考えていると読める論もあれば、その間に一本以上あると考えていそうな論もある。兼永本・兼右本ともに現存する『先代旧事本紀』写本のうち重要な位置を占める写本であり、二写本の関係は明らかにしておく必要がある。

3. 研究の方法

写本自体の調査と検討を主とする研究であるため、第一義的には所蔵機関における実地調査を行う必要がある。しかし『先代旧事本紀』は少なからぬ分量があるため、可能な限りは所蔵機関から譲り受けた写真版にて調査を行った。

卜部兼永本は、天理図書館善本叢書の一冊として影印本が刊行されているため、基本的にはそれを基に研究を行った。ただし白黒版のため少ないながら朱筆部分が不明であったり、綴じ込み部分の字が確認できなかったりする箇所が若干ながらあるため、所蔵元である天理大学附属天理図書館(以下「天理図書館」)にて調査を行った。兼永本は重要文化財に指定されていることもあり、実見は叶わなかったが、カラー版の写真の入手はできた。また、綴じ込みの読めない箇所については、図書館員に確認していただいたことにより、判別が可能となった。

兼右本系に分類されている写本は、以下の通りである。

- A、卜部兼右本(天理図書館)
- B、秘閣本(宮内庁書陵部)
- C、井上頼国本(無窮会)
- D、吉田良熙本(天理図書館)
- E、村井古巖本(神宮文庫)

E以外は先の研究にて複写を入手済みであるため、基本的にはそれによった。Eは複写が不可能なため、数回に分けて所蔵元の神宮文庫に通い、必要な調査を行った。

4. 研究成果

(1) 写本の調査

ト部兼永本

所蔵元の天理図書館にてカラー写真版の頒布を受けた。刊行されている天理図書館影印叢書は白黒版のため、主筆箇所の判別などに必要と判断したためである。

村井古巖本

複写許可がおりないため、所蔵の神宮文庫にて調査を行った。

大東急記念文庫本

鎌田論に言及なく、鈴木正信論にて紹介された写本である。鈴木論によれば三浦為春本系に分類される写本であるが、今回調査を行った。おおよそ、三浦為春本に近い写本と考えて間違いはなさそうである。

なお大東急記念文庫本は、近藤喜博(「先代舊事本紀諸本ところどころ」『日本上古史研究』2-10、1958年10月)がかつて言及したことのある写本であることに、調査の中で気づいた。近藤が紹介する特徴と、大東急本の特徴とは全く一致する。大東急記念文庫で尋ねたところによれば、近藤論の公表から少しして、文庫が購入したということのようである。

(2) 論文「伊勢系」先代旧事本紀の再検討」の公表

本論においては、鎌田が想定した「伊勢系」と名づくべき系統について見直した。

兼右本には、他には見られない「伊勢系」というべき写本の影響があると、鎌田は論じた。「伊勢系」は写本としてまとめて現存してはならず、兼右本や伊勢神道書等に引用される形でのみ見られると、鎌田はいう。確かに兼右本には、縁の深いト部兼永本等他には見られない校合跡や本文が見られる。またそれが、伊勢神道書が引用する『先代旧事本紀』本文とも関わりがありそうなものも、比較すると確認できる。

しかし伊勢神道書が引用する本文とは必ずしも全て一致するわけではなく、また伊勢系『古事記』に書き込まれた『先代旧事本紀』本文とも、いくらかの違いが見られる。そもそも伊勢系と呼ぶことが『古事記』の写本系統に引きずられすぎていることもまた、本論で指摘した。諸点併せて考えると、確かに現在確認できない系統の本がかつてはあったらしいことは想定されるが、それを『古事記』に関わらせて「伊勢系」と呼び、把握すると、写本系統全体を理解する際の妨げになるということになる。

本論では「度会系」という把握の仕方が適切であるという見方を示した。度会氏保有の『先代旧事本紀』との関わりがはっきりわかる呼称の方が、より正確であるとの考えからである。

(3) 論文「猪熊信男旧蔵『肥前国風土記』の複製本をめぐって」の公表

兼永本には影印本である天理図書館善本叢書本が刊行されている。古典の重要写本については、兼永本のように影印本が刊行されているものもあれば、そうでないものも多くある。影印本による研究についても検討している中で、肥前国風土記の猪熊信男旧蔵本について考えることがあり、一論としてまとめた。

猪熊信男旧蔵の肥前国風土記は、現存する同風土記の写本中で書写年代が最も古く、最重要写本とされている。この写本には複製本が存することが知られているが、発行年や発行者をめぐってこれまで言及されてきた論や一覽を見渡すと、情報が錯綜していることに気づく。実際のところ複製本には奥書がなく、書誌的に不明なところが多くある。猪熊本が知られるようになった経緯や複製本作成をめぐる諸情報をまとめ、問題点を洗い出した。

(4) 論文「『先代旧事本紀』兼永本と兼右本の関係」の公表

『先代旧事本紀』の兼永本と兼右本の関係についても、鎌田純一が総合的に論じている。しかし両写本の関係についての鎌田論には不明なところがあり、また時間経過とともにその関係性についても論じていることに変化がある。本論では二写本を改めて見直してみた。

兼永本と兼右本の関係について、鎌田論の最終的な結論としては、兼永本を祖とし、その転写本を兼右本が親本としているというもののである。実際、両写本を見比べると近似した本文や訓点を持ち、非常に近い関係にあることが改めて確認される。本論においては、兼永本と兼右本とが祖本とその転写本にある可能性の一方で、両者が兄弟関係といえる位置にある可能性も捨てず、特徴的な校異を検討した。

特に注目したのは、傍書等から想定される、それぞれの親本の体裁である。本論の結論をまとめれば以下の通りとなる。

- ・兼右本の親本は、兼永本と同じ一行一五字である。

- ・兼永本は兼右本の親本ではない。

- ・兼永本の親本は一行一九字である。

以上から、兼右本は兼永本の流れに属する写本ではあるが、兼永本を直接の親本とはしてならず、間に一本あると結論づけた。一行当たりの字数の変更については、書写者である兼永と兼右、すなわち平野ト部家と吉田ト部家の対立があることを想像した。本論により、旧事紀の現存写本のうち重要な二本について、その関係を明らかにした。

(5) 学会発表「『先代旧事本紀』の諸本に

ついて」

先代旧事本紀の諸本について、現在までに論じられていること（主に鎌田純一の論であり、また最近の鈴木正信の論による）と松本がこれまでに述べてきたことをまとめ、写本については 39 本の写本について簡単な情報と共に一覧にして掲げた。その上でこれから検討されるべき問題点として、以下の諸点を掲げた。

- ・三浦為春本系の検討
- ・兼永本・兼右本・石川忠総本・山田以文本の校合跡の検討
- ・本朝月令や長寛勸文、年中行事抄などに引用された『先代旧事本紀』本文の検討
- ・未調査・未検討写本（徳大寺本・大東急記念文庫本・徳川頼房本・石上神宮本・天海本）の検討
- ・行方不明写本（船橋家本・榊原本・北小路本・兼従本）のまとめ

（6）共著『先代旧事本紀の課題と展望（仮）』の公表

2018 年中に刊行予定の共著である。既に著者校は終了している。

『先代旧事本紀』の諸本研究をめぐる現状と課題」と題し、『先代旧事本紀』の諸本についてこれまで論じられてきた系統分類や特徴などをまとめ直し、あわせて論者が論じてきた系統論を概観した。また、従来見落とされてきた写本や、未発見ながら重要と思われる写本の情報についても整理した。旧事本紀の写本を研究する意味についても、書写されてきた背景に触れながら論じた。学会発表「『先代旧事本紀』の諸本について」での内容をもとに、その後の研究が進んだものも含めてまとめなおした。

『先代旧事本紀』の写本研究は主として鎌田純一によってなされてきた。現存諸本を鎌田は四系統に分類したが、その系統ごとに鎌田論をまとめ（時期によって位置づけが変わる写本もあるため）これまで松本が論じてきたことも付け加えて論点を明確にした。

ト部兼右本系諸本についても、調査によって判明したことをまとめ直した。兼右本系写本としては、ト部兼右本（天理図書館）、秘閣本（宮内庁書陵部）、井上頼因本（無窮会）、吉田良熙本（天理図書館）、村井古巖本（神宮文庫）がある（この他、ト部兼従本がこの系統に分類されることを鎌田は述べているが、兼従本は G・W・ロビンソン所蔵の写本で海外に存し、調査ができない。少し前に出されたジョン・ベントレーの『先代旧事本紀』の研究書に、この兼従本のこととらしい写本への言及がある）。これらは全て、兼右本を祖とした一群の写本であることが確認できた。また詳細に述べると、秘閣本と井上頼因本は親子関係にある。また吉田良熙本と村井古巖本には、共通の親本がある。その親本は兼右本を祖とするものである。なお、

行方不明と先に述べた兼従本は、この良熙本・村井本と関係があると鎌田はまとめている。

また、未調査・未検討写本として、徳大寺本・大東急記念文庫本・徳川頼房本・石上神宮本・天海本についても情報をまとめ直した。このうち徳大寺本・大東急記念文庫本は三浦為春本系としてまとめられた系統であり、近い位置にある。三浦為春本系についても検討を進めているので、近いうちに考えをまとめたい。

また本論では、佐伯有義旧蔵本、北小路本、清魚縣主本についてこれまで言われてきたことなどをまとめなおした。佐伯有義が所蔵していた本は現在行方不明であるが、佐伯自身の論での言及と、新訂増補国史大系の対校本として用いられていたことから様子がうかがえる。しかしその記述は矛盾するようなところもあり、佐伯旧蔵書が複数あったのかも含めて不明な点が残る。

北小路本は近藤喜博旧蔵本であるが、同じく行方不明である。近藤が自身で紹介している論（前掲「先代舊事本紀諸本ところどころ」）及び鎌田『研究』での情報しか知り得ない。他本と比較した場合の北小路本の特徴（主に奥書）についてまとめ直した。

清魚縣主本は新訂増補国史大系本に間接的に引用されている写本であるが、そこに引用されているらしい奥書に注目した。その奥書とは兼永自身の書写奥書で、現存の兼永本には遺されておらず、他には山田以文本が引用していることで知られている奥書である。山田以文本引用奥書との共通点も含め、重要と考えられる点についてまとめた。

以上のような問題点の他、現在『先代旧事本紀』の写本を研究し直す意味についても述べた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

松本弘毅、「伊勢系」先代旧事本紀の再検討、『国文学研究』、査読有、第 180 集、2016、pp.15-27

松本弘毅、猪熊信男旧蔵『肥前国風土記』の複製本をめぐって、『古代研究』、査読無、第 50 号、2017、pp.38-43

松本弘毅、『先代旧事本紀』兼永本と兼右本の関係、『国文学研究』、査読有、第 183 集、2017、pp.1-14

〔学会発表〕（計 1 件）

松本弘毅、『先代旧事本紀』の諸本について、先代旧事本紀研究会（上代文学会）2017、

於早稲田大学

〔図書〕(計1件)

松本弘毅 他、笠間書院、先代旧事本紀の
課題と展望(仮) 2018 予定

6. 研究組織

(1)研究代表者

松本弘毅 (Matsumoto Hiroki)

早稲田大学 文学学院 客員主任研究員

研究者番号: 30434244